



中里介山全集

第十二卷

筑摩書房

中里介山全集第十二卷

昭和四十六年七月三十日発行

著 者 中 里 介 山

発行者 竹之内 静雄
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一―九一

電話 東京(291) 七六五一(代表)

振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式会社 厚徳社

製本 株式会社 矢島製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 71712 (出版社) 4604

目次

京の夢おう坂の夢の巻(つづき)

山科の巻

椰子林の巻

「大菩薩峠」既刊梗概

駒井能登守のために(桑原武夫)

解題(白)(南波武男)

大菩薩峠発表年次

函·装画·横山大観

大菩薩峠

第十二卷

京の夢おう坂の夢の巻（つづき）

四十二

お雪ちゃんを追分から南へ送った日のその晩のこと。

これは大谷風呂ではない、関の清水の鳥居の下から、ふらりと現われた一人の武士がありました。笠をかぶって、馬乗袴のマチの高いのを穿いて手甲脚絆のいでたち、たった一人、神社の石段を下りて、鳥居をくぐって、街道へ歩み出しました。

その時分、もう、さしもの街道にも人通りは絶えていたのです。右は比良、比叡の余脈、左は金剛、葛城まで呼びかける逢坂山の夜の峠路を、この人は夢の国からでも出て来たように、ゆらりゆらりと歩いていました。

どうも、この骨格から、肩越し、足もとに見覚えがある。笠のうちこそ見物だと思つて心配するものはない、前半

の一文笠が、その瞬間、紗のように透きとおつて、面が螢の光のように蒼白く夜の色を破つて透いて見えるのです。さては思ひなしの通り、この人は机竜之助でありました。

絶えて久しい、この人の姿を逢坂山の上で見る。いつのまに健康を取戻したか、姿勢はしゃんとして、しかも、足許がきまつている。杖の力を借りないで、百里も突破する体勢になっている。眼は癒ったのだらう。その証拠に、今、紗のように透き通った笠の前半を見ると、切れの長い眼が、真珠の水底に沈んだような光を見せていた。関の明神の下で、草鞋の紐を結び直したあの手もとを見てわかる。眼の不自由な者に、あんな手に入つた扱いはできない。

街道へ出て、人なき大道をこの人は、真直ぐに京山科方面へ向つて、のつしのつしと歩んで行くのです。

その足どりは甚だ軽く、腰に帯びた大小の蠟色もおだやかで、重きに煩う色はない。

行き行きて追分の札の辻まで来る。ここは朝のうち、伏見街道を行くお雪ちゃんと、両国手とお角さんが送って来て、さらばさらばをしたところ。

「柳は緑、花は紅」の石標に腰打ちかけた机竜之助、前途を見渡すと夜色が京洛に立てこめている。昼間に見たところでは、追分の辻から左右ともに、人家が櫛の歯のように並んでいたと覚えていたが、真夜中というものは、時代を一世紀も二世紀も逆転して見えるもので、風景もおのづからその時代の風景ではない。右手にながめる比良、比叡の山つづき、左にわたる大和、河内への山つづき、この間は一帯の盆地、京洛の天地はいずれのところにあるや、山科宇治も見渡す限り茫々たる薄野原でありました。

机竜之助は、「柳緑花紅」の石に腰打ちかけて、腰なる煙草入を取り出して、燧石をカチカチ、一ぶくの煙草をのみ出しました。今日まで机竜之助が杯を傾けたということは見えていたが、未だ煙草をのんだという記録はなかったように思う。ここへ来てはじめて悠々と煙草をのみ出して

いる。煙草をのみながら、透綾のように透き通る笠の、前半面から、悠然として、目に余るすすき野原をながめているのであります。

そうすると、暫くして、行手の右の方の蜿蜒たる一筋路は伏見街道——やはり、すすき野原を分けて、見えつ隠れつ、一い、二う、三、三挺の乗物が、三人の従者に附添

われながら大和路へ向って行くのを見る。

「おーい」

と机竜之助が、これを見かけて、片手をあげて呼ぶと、あちらでも、

「おーい」

答えはあったが、人が見えない。

机竜之助は、あわただしく火打道具を腰にはさんで、笠の紐をとって、それを片手に高く打振りました。

「おーい」

あちらでも、

「おーい」

すすき野原の中から、こだまを返して、返事はあるが、あちらでは手を振る人もなければ、ひらめかす笠もあるではない。乗物はずんずんと離れて進んで、すすき野原の中へ、見えつ、隠れつ、行く手は大和、河内の山、そこへ没入してしまいうげに見える。

「おーい」

竜之助は何と想着か、突然に腰かけの石を立て、二歩進み出し、また笠を手強く振って、

「おーい」

こんどは返事がありません。返事のないことは、もはや、さいげんの乗物がすすき野原を打過ぎて、大和、河内の山の中へ没入してしまつた証拠です。

それと知りつつ竜之助は、またも二歩と三歩と進んでみ

ましたが、もうおとなうものは、谷川のせせらぎのほかは何もない。

茫然として、そこに立ちつくしていると、

「おーい」

今は人を呼びかけた身、今度は後ろから人に呼びかけられるらしい声がある。

「何だ」

「おーい」

「おーい」

相呼び、相答うる双方の声はまだ遠いのに、不意に竜之助の肩に後ろから手をかけた者がある。その手は軟らかい白い手でありました。

「あなた」

「誰だ」

「どちらへいらつしやるの」

「どこへ行くとうと……」

手だけは肩にかかって、声はするが姿は見えない。あまりにけつたいなる物のたずね方なので、竜之助、怒気を含んで見返ろうとしたが、この背後が磐石いんせきのように重い。

「島原へいらつしやいよ」

「島原へ——」

一方の白い軟らかい手が、自分の左の肩にかかっていたかと思うと、今度は、右の方の眼の前へ一つの白い軟らかい手が現われました。そうして、しかもその軟らかい手が、

五体にくっついていないのです。手首から下はありやなしや、その指先だけが、

「島原へ——」

と言つて、一方の空を指している。この指したところを見ると、ぼうつと、一隅だけ酸漿しそくじょうのように赤い。

「あれが島原か」

「もう一ぺん、あなたを島原で遊ばせて上げたい」

「……………」

「皆さん、相変らずお盛んでございますよ、芹沢せうざさんは殺されましたが」

「近藤勇は無事か……」

「無事どころか、飛ぶ鳥落す勢いだよ、わは、は、は、は、は」

それは軟らかく白い手首の女の声ではない、豪傑的なすさまじい高笑いでありました。

「誰だ」

と振り切つた時は、竜之助の身が軽くなりました。島原へ——指したその手は細く柔らかい手でしたが、高笑いには、決してその手に相応する声ではありませんでした。このすさまじい高笑いが起ると共に、左の肩に置かれた細いしなやかな手も、右で指された島原の白い手首も、すつと、震を引いたように消え失せてしまつて、竜之助が振返つた背後には、雲を衝く大男が一人、大手を振つてのっしのつしと歩み来るのを見受けます。

「は、は、は」

先方は、すさまじい豪傑笑いを以て、竜之助の背後に迫り来ったのです。その時に、発止と思い当った竜之助は、二三歩すすって身構えざるを得なかったものです。

「喫驚したかな、田中新兵衛だよ、示現流の、主水正清の田中新兵衛だ」

「うむ——また出たか」

「今度は果し合いの申込みなんて、そんな野暮な真似はせぬから安心し給え、おいも、久しぶりで京都へ入るのだ、いい道連れを欲しいと思つていたところへ君が来たので嬉しいよ、昔のことは忘れて、旅は道連れの情けを以て、つき合つてくれ給え」

いかにも、そういう声は田中新兵衛である。その昔、この道を通つた時に、不意に背後から呼び留めて、白昼、真剣の果し合いを申込んだあの白徒である。だが、今宵は、あの時と打つて變つたあけっぱなしの、隔てのないものの言いぶりで、豪傑肌こそ昔に變らないが、殺気などというものは微塵もない、真に己れも淋しいことあつて、友を呼ぶ魂のように聞えるから、竜之助も極めて安心をしつつ、その追いつくのを待つていると、ほどなく近づいた右の豪傑は、竜之助を見て莞爾として笑つたかと思うと、竜之助の腕をとつて、親しみの態度を現わしました。竜之助も手をさしのべてさわつてみたが、その手は荒いけれども、そのさわりは極めてつめたい。

「いやに冷たい手をしているな」

「は、は、は」

「どこへ行つての帰りだ、そうしてこれからどこへ行こうというのだ」

「美濃の関ヶ原から来たんだが、これからまた京都へ行くのだ、京都はどこという当てもないが、せつかく君と同行のことだ、君の行くところへ僕も行くのではないか」

田中新兵衛は極めて親しみを以て、こう言いました。思えば自分も一人旅、逢坂山の関の清水を立ち出でて、足はこうして京洛の地に向いてゐるけれども、さて、今度の都入り、誰を当てに、ドコへ落ちつくかうという目的があるではないのだ。田中新兵衛から、こう持ちかけられてみると、竜之助はいまさら自分の行手を思索する氣にもなる。

「拙者は島原へ行かうと思つてゐるのだ」

「島原——結構」

と田中新兵衛が言下に応じました。竜之助が島原と言つたのは出まかせである。最初からそこへ目的を置いたわけではなし、そこになんらの知己ある人がゐるわけではないが、今の先、島原へと誘引した白い手首があつた、そのことが眼先にちらついていたものだから、つい口頭に現われたものだが、この際は自分ながらよく言つたと思つた。

今の竜之助としては、会津へ行くとも言えまい。壬生へ参るとも言えまい。京洛の天地に彼が名乗りかけて、草鞋を脱ごうという心当りは一つもない。ただ、島原だけは万

人の家である。あすこには、いかなる人をも許して拒まない女性がいる。

そこで二人は、無言に轡を並べて、薄野原を歩み出しました。行けども行けども薄野原で、京伏見への追分路が、こんなに野原続きのはずはないのに、ほとんど無限の野原つづき。しかもその前面には、たえず「柳緑花紅」の石ぶみが並び進んで離れない。ただ安心なのは、この不意打ちの旅客に、今宵はドコまで行っても殺気というものが湧いて来ないことである。昔のように、警戒も、残心も、さらに必要がなくて、ややもすれば同行同向のなつかしみににじみ出でて来る。竜之助は全く打ちとけた心になって、かえってこちらから隔てなく話しかけるような気分になりました。

「その後、拙者は身世の数奇というやつで、有為転変の行路を極めたが、天下の大勢というものにはトンと暗い、京都はどうなっている、江戸はどうだ、それから、君の故郷の薩摩や、長州の近頃の雲行きはどうなっている、知っているなら話してくれないか」

「うむ、僕もよくは知らんが、君よりは一日の長があるかも知れん、知っているだけ物語って聞かそう。まず、君にも何かと縁故の深い壬生の新撰組だな」

「うむ——どうだい、あれは」

「近藤勇がこれを率いて、土方がそれを助けている、今の新撰組はことごとく近藤によって統制されている、新撰組

の近藤ではない、近藤の新撰組だ、いや新撰組の近藤というよりも京都の近藤だ、京都の近藤というよりも、近藤あつての京都の町だ、近藤の威力は飛ぶ鳥を落し、泣く児もだまる」

「近藤勇——それほど勢力となりおったかな」

「市中の威力は町奉行以上、守護職以上、脱走の大藩浪人共も、かれの前には猫のようで、彼を怖るること虎の如し、全くエライ勢いだよ」

「彼もたいした英雄でもなかるうが、時の勢いで、威がついたのだな」

「たいした英雄ではないかも知らんが、たいした勇敢だ、是非名分はトニカクとして、あれだけの勇氣ある奴はない、あれだけの決断のある奴はない、勢いの帰するところ、必ずしも偶然とのみは言えないのだ。そもそも彼が今日の威力を得たことも、必ずしも蛮勇と僥倖とのみは言えない——ドコかに一片の至誠の人を打つものがあり、多少ともに人を御する頭梁の器があればのことだ。彼の今日に至るまでには、血の歴史がある。血の歴史と言ったところで、人を斬って見るその血のこのみを言うのではない、自分の精神的にだ。精神的に、血涙を呑むの苦闘を嘗め来った、それを言うのだ。近藤を蛮勇一辺の男とのみ見る人は、その胸臆をよく知らないものだ、彼は珍しく純などところのある血性の男児で、憎むことを知る男だよ。彼にこの血性の有する限り、血の歴史はまだまだ続くよ」

斯様に語り来った新兵衛の言葉には、幾分なりと近藤に對する同情がほの見える。いわゆる勤王方の中心勢力たる薩摩のうちに、かえつて近藤を諒解する男がいるということとを、竜之助も不思議なりとして、

「あれはあれだけの男だろう、あれの器量として、今の地位は過ぎたるものか、及ばざるものか、その辺は拙者は知らない、だが、あれもいい死にようはしないだろうが、死場所を与えてやりたいものだ」

何とつかず竜之助が、斯様に挨拶したのを、田中新兵衛はまた高笑して、

「は、は、は、その点は御同様、君も、僕も、いい死にようはできなかった」

できなかったがおかしい。できなかったでは過去になる。過去に解決を告げてしまった語法文法になる。文法や語格には注意を払わない竜之助は、

「そうなると、近藤に万一のことがあるとなつた暁は、今後の新撰組は誰に率いられるのだ」

「そこだ——路傍の噂では、伊東甲子太郎が最も有望だということだが、くわしいことはよくわからんが」

ここまで語り合つた時に、不意にまた路傍から声がかかつて来た。

「その話なら、僕がくわしいよ」

二人は驚いて、その声のする方を見やると——

闇中からのそりと出て来た、旅すがたは平民的……いつ

かは奴茶屋の前まで来ておりました。その奴茶屋の縁台に腰打ちかけ休んでいた一人の發言でした。

「やあ、山崎君ではないか」

これはこれ、新撰組の一人、香取流の棒の名手、変装の上手、山崎讀でありました。

四十三

なるほど、山崎ならば、新撰組の近状を知ることゝ於て田中以上だろう。奴茶屋に休んでいた山崎は、闇中から不意にしゃしゃり出たと見ると、二人に押並んで歩調を合わせながら、

「では、僕が代つて、その後の新撰組の状態と、今後の予想とをくわしく話して聞かせようではないか——」

と言って、懷中から何か一ひらの紙切れを取り出して二人に示し、

「まず、これを一覽し給え」

暗いところではあり、かつ、会話はしながらも、これは無性に進行している途中ではあり、そこで急に紙片をつきつけられたからとて、本来読めるはずのものではないが、そこは不思議にも、

「どれどれ」

と言つて受取つた二人の前へ、笠から透きとおつて、その巻紙の文字がありありとわかるのであります。読んでみま

すと、それは次のような人名表でありました。

見廻組頭格	隊長	近藤 勇
同 肝煎格	副長	土方歳三
見廻組 格		沖田総司
右 同断		永倉新八
同		原田左之助
同		井上新太郎
同		山崎木一
同		緒形俊太郎
見廻組 並		茨木 司
同		村上 清
同		吉村貫一郎
同		安藤主計
同		大石鍛次郎
同		近藤周平
物組残らず見廻御抱御雇人仰せつけられ候		

卯六月

これを二人が、すらすらと読んでしまつて、田中が、

「なるほど、こうなつてみると、新撰組は残らず幕府の方へ、お抱え、お雇入れ、仰せつけられ、ということになつたのだな、金箔付きの御用党となつたわけぢやな」

「そこだよ」

「よく、これで納まつたな」

「納まらないのだ、これで近藤は御目見得格以上の役人と

なり、大久保なにかしという名をも下され、土方は内藤隼之助と改名まで仰せつけられたというわけだが——納まるはずがない、本人たちは一応納まつたが、納まらぬのは多年の同志の間柄だ」

「そうだろう、一議論あるべきところだ」

「本来、新撰組というのが、幕府の爪牙となつて働く放漫有志の鎮圧を専門としているが、もともとかれらは生え抜きの幕臣でもなんでもないから、その御すべからざるところに価値があつたのだ、彼等は事情やみ難く幕府のために働くとは言ひ、彼等の中には勤王攘夷の熱血漢もあれば、立身の梯子として組を利用しているものもある、天下の壬生浪人として大手を振つていたものが、公然幕府の御用壮士と極印を捺されることを本意なりとせざるものがある」

「それはそうありそうなことだ、で、右のように彼等が役附いたとなると、当然それに帰服せざるやからの出処進退というものが見ものだな」

「そこで、一部のものに不平が勃発し、その不平組の牛耳が、今伊東甲子太郎なのだ」

「また新撰組が二分したか」

「いや、そんなりと二分ができれば問題はないのだが、新撰組の組織というものが決して脱退を許さぬことになつてゐる、脱退は即ち死なりと血誓がしてあるのだ、近藤に平らかならざるものも、隊としての進退が決した以上、それに不服が許されない、脱退も許されない、進退きわまつた

のだが、そこは伊東の頭がよい、誰にも文句の言えない名分によって辞職をして、新たに別の方面へ分立することができたのだ」

「はゝあ、伊東という男、そんなに頭がよかつたかな、そうして、その分立を近藤が素直に許したのも不思議ぢやないか」

「しかし、そこが伊東の頭のよいところで、近藤といえどもこれには文句のつけられない名分を選んだのだ」

「どういう名分なんだ」

これらの問答は主として、山崎謙と田中新兵衛との間に取かわされている。机竜之助はただ黙って聞き役である。だが、語ると黙するとかかわらず、三人の足は歩調を揃えて絶えず京洛の方へ向つて進んでいるのだが、行けども行けども埒（はら）らないこと夥（おほ）しい。やっぱり荒涼たる荒野原で、行けば行くほど「柳緑花紅」がついて廻る。

四十四

山崎謙は、相変らず能弁に新撰組後日物語を語りながら歩いてゐる。

「もともと伊東は頭もよし、才もあるから、天下の形勢を近藤よりは一層広く見ている、近藤のように幕府一点張りの猪武者（いのしや）ではない、これは勤王攘夷で行かなければ事は為せない」と見たものだろう、その意見の相違から分立の勢い

となつたが、今いう通り、新撰組そのものの組織が分立を許さない、そこで伊東が大義名分に立脚し、近藤といえども文句のつけようのない名分を発見して、それで分離の実を挙げたというのは、彼は策をめぐらして、泉涌寺の皇家御陵墓の衛士を拝命することになつたのだ。他のなんらの目的、理由、事情を以てするとも許されない新撰組の脱退も、皇室の御用勤務ということになると齒が立たない、さしもの近藤もその点に屈服して、ついに伊東甲子太郎を首領とする一派の新撰組脱退を許したのだ。彼等は喜んで一味と共に新撰組を去り、別に東山の高台寺へ屯所（とんしよ）を設けたのだ。そこで彼等は新撰組隊士でなく、御陵衛士という新しい肩書がついた、そうして、屯所が右の高台寺月心院に置かれたところから、人呼んでこれを高台寺組という、まず、この面（おもて）ぶれを見給え」

と言って、山崎謙は、またふところから別の紙切れを取り出して示すと、二人は前と同様にして見ると、次のような文字がありありとうつる。

御陵衛士	伊東甲子太郎
同	篠原泰之進
同	新井 忠雄
同	加納 鷗雄
同	橋本 皆助
同	毛内 監物
同	服部 武雄

御陵衛士 中西 昇

同 鈴木三樹三郎

同 藤堂 平助

同 内海 二郎

同 阿部 十郎

同 富山弥兵衛

同 清原 清

同 佐原 太郎

同 斎藤 一

右の人名表を二人は、一通り眼を通してしまうと、紙切れを山崎の手に戻す。それを指頭でひねりながら、山崎が語りつづける――

「事の順序として、伊東甲子太郎という男はどういう男であつたか、それを説明して置こう。伊東はもと鈴木大蔵といつて常陸の本堂の家来なのだ、水戸の金子健四郎に剣を学んでゐる、芹沢と同様、無念流だ、江戸へ出て深川の北辰一刀流、伊東精一に就いて学んでゐるうちに、師匠に見込まれて伊東の後をついだのだが、腕もあるし、頭もよい、学問も出来る、なかなか今の時勢に雌伏して町道場を守つていられる人間でない、髀肉の歎に堪えられずにいるところへ、近藤が京都から隊士を募集に來た。近藤は、兵は東国に限るという見地から、わざわざ関東まで出向いて募集に來たのだ。その時に伊東が一味同志を率いて、これに参加することになったのだ。その一味同志というのが、この

表にもある名前の大部分で、鈴木三樹三郎は彼の弟である、中西昇と、内海二郎はその代稽古をしていた、これに服部三郎兵衛、加納直之助、佐野七五三之助、篠原泰之進ら八人が打連れて、近藤とものともに京都へ上つて行つた、それがそもそも縁のはじまり。その伊東以下がここに至つて、前に言う通りの事情と名分とを以て、首尾よく新撰組と分離を遂げてしまつた上に、新たに『御陵衛士』の名目を得て、立派に一隊を組織して盛んに同志を募りはじめた」

「それを黙つて見ている近藤でもあるまい」

「その通り――伊東が芹沢と同じような運命に送られるか、或いは新勢力が旧組を圧倒して立つかの切羽になつた。そこへ持つて来て、伊東が分離した時に、同時に分離して御陵衛士に入るべくして入らなかつた一団がまだ新撰組のうちに残つてゐる、その面ぶれを挙げてみると、佐野七五三之助、茨木司、岡田克己、中村三弥、湯川十郎、木幡勝之助、松本俊蔵、高野長右衛門、松本主税といったところで、これがどうかして脱退したいと、ひそかにその機を狙つていたところへ、右の特遇問題が起つて來た。近藤らは甘んじて幕府の金箔附きの御用党となる建前である、近藤としては、一士民から直参になり、あわよくば国主大名にも出世し兼ねまじき路が開かれたのだらうが、最初の同志浪人の面目は台なしだと、不平分子がこの機会にいきり出したのも無理のないところがある」

「そうだらう、浪人として集まつたものの中には、浪人な

ることを本懐として、役人たることはいさぎよしとしないものが多々あったはずだ」

「その通り、我等は浪人として勤王攘夷を実行せんために、新撰隊に加盟したのだ、いまさら徳川の禄を食んで、その爪牙となるわけにはいかぬ、新撰隊そのものが、そういうふうに変化した以上は、我々の隊に留まるべき大義名分は消滅したのだから、脱退して新たな出処につくことが士の本分である、至急、我々の脱退を認めろ、というのが、これらの者の主張であって、これを右の直参待遇問題を機会にして、彼等が正面から近藤にぶつかって行ったのだ」

「それを素直に聞くようなら、近藤も近藤でないし、新撰組も事実上の消滅だ。してその成行きはどうなった」

「右の十名のものは、右の意見を發表すると共に、袖をつらねて高台寺の伊東のところへ走ったが、それをそのまま受入れたのでは、高台寺組と新撰組が正面衝突になる、いや、高台寺組が新撰組へ公然宣戦布告ということになるから、さすがに伊東もそれは受入れない——投じて来た十名の者を論じて、諸君がそういう意志なら、僕のところへかけ込んで来るよりは、会津侯へ行ったらよからう、何と言つても新撰組は会津が監督していることになるのだ、会津侯に向つて、大義名分の理由により進退を決めるということとを公明正大に申し述べて、立派に分離の手續を取るのがよろしい——こういうように伊東から論じられたので、それに従つて会津侯へ請願書を出したが、会津でも扱いきれな

い。本来、新撰組は会津の監督とはいふものの、会津といえども、譜代といえども、新撰組に対しては監督というも名ばかりで、一目も二目も置いている、今の新撰組は嚴然たる一大諸侯以上の存在である。そこで右の請願書を受取つた会津の公用人は困つてしまつて、これは当方の独断では取計らい兼ねるによつて、一応近藤の方へも照会して、追つて返事をするという挨拶であつた——」

「そうだろうとも。会津といえども、宗家といえども、新撰組は扱いきれない、譜代なら譜代のように、大藩といえども処分のしようはあるけれども、新撰組は本来、骨からの浪人だ」

「そこで、会津から改めて近藤の方に旨を通ずると、近藤の返事がこうだ、さようなお取上げは一切御無用に願いたい、これと申すも、伊東あたりが背後にいて糸を引いてのことと思うが、こういうことが続発した日には、新撰組の致命傷だ、何はともあれ、一同の者はひとまず隊へ立ちかえるようによくおさとしが願いたい。そこで会津からこの旨を脱退組に申し伝えると、彼等はまたそういうことをいままさ承知するはずがない——では明日改めてということになって、十人が打揃つてまた会津屋敷まで出かけることになつて、その前に伊東に會つて打合せをすると、伊東が言うことには、まあ今日は会津屋敷へ行くのは止せ、相手が一筋縄ではいかない奴だから、どんな計略をしてないともわからぬ、それにひつかりに行くのは危険千万だ、と言